



TITLE:

漢簡二題 (特集 漢代綜合研究)

AUTHOR(S):

吉田, 光邦

---

CITATION:

吉田, 光邦. 漢簡二題 (特集 漢代綜合研究). 東洋史研究 1955, 14(1-2): 123-136

ISSUE DATE:

1955-07-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139034>

RIGHT:

## 漢簡二題

吉田光邦

## 一 曆譜のなから

武帝の太初元年 (B.C. 102) の夏五月に改暦が行われて、太初暦が一般に用いられることになったことは、正史に記されていることであるし、またそれを改正した劉歆の三統暦については漢書律曆志が詳しく述べている。だからそうした當時の曆術の内容については、これらの正史にもとずくことによって、わたしたちは相當なまでに確かなその實質を知ることができるわけである。しかしそれらの曆法または曆術が實際に一般社會の間に浸透していった時のようすについては、いわゆる正史ではなにも知られていないのである。

それゆえ敦煌簡や居延簡に含まれている種々の曆譜の残

缺は、そうした實際面での使用のさまを知るのにちようにと適當な資料となるわけであって、こうした曆譜のそれぞれについての年代同定や内容の研究も多くしとげられているのである。だから曆譜の内容については、今更くいかえすこともないわけであるけれども、以下ほんの落穂拾いともいうような考えで、二三の簡について記してみようと思う。

大陸雜誌二一〇で趙榮琅は「漢簡曆譜」という小論を発表して、敦煌簡にみられる各種のタイプの分類をこゝろみた。即ち誰しも氣ずいていたであろうが、元康三年・神爵三年 (T.VI) と同定されているものが縦横の座標型の讀み取りによって使用する型のものであることに注意したのである。この型では一年に三〇枚の木簡が連ねられ、一枚

は最上段に日數、以下十二段に毎月の相當日の干支を記入するわけであり、四立、二至、二分が注されており、また簡を連ねたまゝ裏返せば閏月の分の干支が同じく右から左へ記入されているのである。神爵三年はちょうど閏年であつてこの點からも神爵三年の曆譜は恰好の見本となつてゐる。またもうひとつのタイプは五鳳元年八月と同定されたもので(T.VI)、一月を一枚の簡に書き記しており、表に十七日分の干支、裏に十二日分の干支を記している構成をもつたものである。この二種の中、前記の座標型ともいえる形式は最もひろく用いられたものらしく、この型は居延簡においてもいくつも見出されるのである。しかしタイプという點からいへば居延簡ではさらに二種ほどの型がある。一つは各月のそれぞれの日について干支と日附を横に順次に書き流していったものであり、一つは各月ごとに一月を五―七段程度に割つて干支と日附をやはり右から左に四日から六日分ぐらいづゝを書きならべてゆく仕組のものである。

このようにいろいろな種類の書き方が見出されるのであるが、そのうちで一等基本的なタイプはやはり座標型のもの

であつたかと思われる。というのはこの例が多く見出されているということもあるが、一年を座標型に組立てて、一年分のまとまつた形が推定されるのはこれのみであつて、他は一月分づゝ獨立できるように作られているからである。座標型というものはちよつと馴れないと讀みとりにくいものであるし、それにこれは月と日附と干支を順次に讀みとつてまとめてゆくだけの心理的な努力を必要とするものである。それに比べて他の型はすべて月も日も干支もそのまま讀み流せる樂な構造となつてゐることからみて、私的なものであつたか、または下級官などの間で用いられたものなのであらう。このほかに張鳳の漢晋西陲木簡には建安十年(A.D. 205) 曆書と同定されたもので、一年を二枚に分けて記したかと思われるものが一個紹介されている。これは近刊されたマスペロの敦煌簡の解讀にも採録されていて永始四年(B.C. 13)とされている。そのタイプはすい分特殊のもので、最上段には正月から十一月に至る奇數月の干支、朔、大小を左から右に記し、その下には五段にわたつて干支表を入れてこの段のみは右から左へ讀むように記してあり、さらに二分、二至、四立、伏日がそれぞれの相當

干支の下に月日を書きこまれているという組立のものである。この組立からいえば偶數月を記したもう一枚の簡があったはずであろうし、下の干支表は朔の干支を知った時に、必要な日の干支を求めるために利用されたのであろう。だから最後に干支を求めるという目的からいえば、さきの座標型のそれと同じ意味合いのものである。このカレンダーに示されている月朔干支に相當するものは元封五年、永始四年、天鳳六年、建安十年等があつて、張鳳の建安十年説やマスペロの永始四年説などが生れるわけである。しかし幸いにこの簡には冬至十一月廿八日、夏至五月廿二日等が明らかに記されており、しかもマスペロの示す寫眞によつてもこの文字は明瞭であつて疑う餘地のないものである。そこで冬至が十一月二十八日という條件を充すものを探めてみると、永始四年のみがこの條件にあてはまるものである。だからこのカレンダーはマスペロ説の永始四年でよいのであつて、彼が同定年號に付している？ は取り除いてもよからう。

これに類するものももうひとつある。それは敦煌簡のシヤヴァンヌが永興元年 (A.D. 153) に同定したカレンダー

である (T. XI)。これについては最近中村清二博士が敦煌博士への私信において元康元年 (B.C. 68) のものではないかと疑問を示された。そしてこの意見を “On Recording Wooden Pegs Unearthed at Touen-Houang by Aurel Stein” (Proceedings of Japan Academy, vol. 30 (1954). No. 10) として發表されている。しかしこのカレンダーは先のものと異り、月朔干支が知られているだけで他の條件が分らないので月朔干支の點からいえば A.D. 153 でも B.C. 65 でも適合するのである。

シヤヴァンヌはこの簡と共に得られた一簡 (シヤヴァンヌ No. 8) に記された句を急就章とよめてゐる。急就章は漢書藝文志によれば元帝 (B.C. 48—33) の世に黃門令の史游が作ったものといふことになつてゐる。このことから彼はこのカレンダーを A.D. 153 と考えたのである。一方流沙墜簡においてはこのカレンダーの年號同定に賛成してゐるが、他方ではシヤヴァンヌの急就章とした簡を蒼頡篇と考へてゐるのである。蒼頡篇も漢書藝文志にのせられており秦丞相李斯以下の作者があげられてゐる。もし蒼頡篇とするならば、シヤヴァンヌは急就章という同定を指標として

A.D. 153 にきめたのだから、當然シャヴァンヌの同定には賛成できなくなるはずである。流沙墜簡ではこゝに食い違いを示したまゝになっている。

流沙墜簡の場合、蒼頡篇と同定した要點は秦漢の字書では四字句系統のものと、七字句系統のものがあり、蒼頡篇は前者に屬するものであり、急就章は後者に屬するものと考え、この問題の簡は四字句から成っているから蒼頡篇としてよいのである。清の孫星衍の集めた蒼頡篇によつてみると、すでに羅振玉もあげているように考妣延年とか漢兼天下等の句がみられるが、訓纂解詁上を調べてみると蒼頡篇は煌煌、快快、黠黠などの二字句から本文が成立が成立していたと考えられる。だから羅振玉のいう四字句も成立するわけで蒼頡篇の本文とみてよい。しかし訓纂解詁中から以下は一字づゝの解が與えられていて、必ずしも本文を偶數字句と推定することはできないけれども、漢書藝文志で六十字一章といっているから二字又は四字句の偶數字句であったということは考えられる。なお流沙墜簡中の羅振玉のこの部分の考釋が學術叢編の卷二に再録されているが、王國維はこれに追補してやはり蒼頡篇の本文とし

ている。

さてこれらの諸點から考え合せると、羅振玉、王國維の蒼頡篇說、シャヴァンヌの急就章說では前者の方がよいように思われる。それではこの點から果してさきのカレンダーの年代をきめることができるだろうか。そこで問題のカレンダーの出土點 T. XI から得られた全簡のもつ年代の廣がりを調べてみる。するとこの點からは年號のあるものとしては神爵二年、四年 (B.C. 60—58) の弩について記した簡、陽朔二年 (B.C. 23) の車馬關係の簡が知られている。だから T. XI では B.C. 60—23 の幅が考えられる。この他蒼頡篇と考えられる斷簡がやはり T. XVII, T. XX, T. XII の三點から出土しているが前の二點には年號をもつ簡がなく、T. XII では A.D. 1—21 の廣がりを與える年號を示す簡が知られているのである。だから蒼頡篇をインデックスとすれば、これを含む木簡は少くとも B.C. 60—A.D. 21 の廣がりの簡であるといえよう。そうすれば中村清二博士の説のように A.D. 153 を B.C. 65 即ち元康元年の曆と改めるのがよいように思われる。

しかし敦煌簡の出土地點別にした簡が含む年代上の廣が

りはずい分深いのである。明らかに年號のある簡のみから、各出土地點の年代深度を調べてみても T. XV の一九八八年間、T. XIV の一八三年といったような深さがある。しかしこれは例外的のもので一般には五〇年内外が深度の主値として得られるのであり、前の蒼頡篇の場合もこれに含まれることとなるので、まず元康元年曆ときめることは、永興元年曆ときめるより、より確かであるといえよう。また一年を一譜に記したものとえば永光五年の曆譜(T. IV. T)がある。けれどもこれは月の各朔日の干支と二分二至や伏日を記しているにすぎず、一種のメモともいうような性質のものであつて、純然たるカレンダーとは考えにくいものといわねばなるまい。

こうした各種の諸殘簡のカレンダーのなかで實際に用いられたつながり方がみとめられるものとして、勞榦も指摘しているのであるが、居延簡の歷譜類中の(八七)が書檄類の五・一〇、一〇・一一七の記事と對比される性質のものであることはちよつと眼をひくことである。夏至と冬至の日に兵事をはじめとして諸種の行事を休むことは蔡邕の獨斷をはじめ、劉向の五經通義、杜佑の通典などにもひとしく

記されていることであり、その理由はいずれも夏至、または冬至は陽氣または陰氣が極點となる時期であつて、それ以後陰氣または陽氣が少しづつ動きはじめるので、それを助長するということになっている。ところで今居延簡の曆譜をみると「寢兵」は夏至の前々日にとられており、夏至の後二日目は盡と記されている。つまり兵事を休むことは夏至を中心とする五日間だったのであり、寢兵はその最初の日であり、盡はその終りの日の意味なのである。この五日という期間は獨斷に記されている期間と全く一致しており、夏至または冬至を中心とした休業期が實際に行われていたものであることが知られるのであり、冬至、夏至を中心として一種の物忌みにも似た慎みの時期のあったことは注意をひくことがらである。それからもうひとつ「抒井易火」がある。勞榦もいうようにこの「抒井易火」の中改火については論語は一年に一改、周禮では一年に四改、鄴子是一年に五改という説の混亂がある。しかし居延簡では改火のみではなく、水と火とともに新しくするというのである。續漢書禮儀志は夏至には改水、冬至には改火と述べていてこれも違っている。たゞ管子の禁藏篇が三月に「抒井

易火”を行う事を述べているものが、水火を共に易える場合として取りあげることができる。

これらの抒井改火の行事が聖火や水神につながる一般的な古代信仰の祭儀の一端であることはいうまでもない。ローマ人が三月一日に彼等を守る聖火を改めたことはクーラソジェが「古代都市」の中で説いている處であるし、そうした古代の人々や今日の原始民族の間における火と水の信仰の數々の例はいちいちあげるには及ぶまい。しかし漢代にこれら「抒井易火」が邊郡においてこのように行われていたにかゝわらず、諸種文献の示す處が全くこれと一致しないものが多いのはどうした理由によるものであろうか。

その疑問に對しては、こうした古代的な信仰が次第に儒家の儀禮思想に押し流されてゆく姿を暗示するものではないかと考えられる。同じく水と火とともに變える場合を述べている管子にあっては、その時期は三月であり、居延簡では夏至なのである。こゝにある夏至という規定はきわめて儒家風の合理性、觀念性をそなえたものであるといわねばなるまい。それは天文學的な意味、晝夜の差の最大期という意味はもつけられども、生産年を劃する時期ではない。三

月という期はこれに比して全く生産年において生れたピリオドである。古代的祭儀の多くのものが、生産年における區切りとして與えられているのを考えるとき、わたしたちは管子の示す三月が恐らく原形であり、居延簡のそれは儒家の陰陽思想によつて觀念化された結果のものであらうと考えることができるのである。もちろん夏至祭、冬至祭という形もまた東西の古代信仰に共通なものである。しかし冬至祭ではその多くに復活思想との結びつきがみられており、夏至にはむしろ衰えゆく太陽にエネルギーを與えようなどとする呪的な心理的性格をもったものが一般に知られているのである。それからみれば、すでに述べた寢兵の例もまたこうした夏至祭或は冬至祭の痕跡とみなすことができるだろう。

表をかゝげ烽火を擧げて邊境を守る人々にとって火は重要なものであった。また同時に生命を托する水の供給源としての井戸も重要な意味をもっていたことは各種の木簡からも、また候賒の名稱からもたやすく想像されることである。こうした環境にあった時、水と火に對する信仰が變形されつゝも保存されることは當然ではなかつたろうか。し

かも邊境の人々が使用した發火具は鑽に類するものであったが(三・五・三)、また名高い淮南子にいう陽燧のごとき凹面鏡を用いての集光による發火のような呪的な器具の使用も想像される(五〇・五・二〇)。だからこの場合の易火は管子の文にいうと同じく、發火具たる鑽の類を新しいものにとりかえる程度のものであったのか、それとも凹面鏡による呪的な方法が用いられていたのか、今のところまだきめにくいのである。

#### (補注)

以上の文中で述べた簡の中、カレンダー關係のものは、すべて「居延漢簡考釋」歴譜類、「流沙殘簡」小學術數方伎書考釋、「漢晉西陲木簡二編」歴表 ED. Chavannes : Documents Chinois Découverts par Aurel Stein, H. Maspero : Documents Chinois Découverts par Aurel Stein に示されているものである。また「持并易火」の簡は「居延漢簡考釋」卷一(五頁)にあるもので、よく知られている簡だから、こゝには録しない。また三〇・五・三は同書卷二(二二〇頁)『出火椎鑽二』、四〇・五・一〇は『出火鑿二具』(三六六頁)とあるものである。

## 二 木簡をとおして

居延城を中心とする諸々の城塞が集積しつづけていた木

簡はいったいどれほどの量のものであったのだろうか。もちろん木簡は削られては再びくりかえして用いられていたものである。けれども——中央集權によってゆるみない統制を確保していたとされるその國家の組織をつないでいた神經であり血管であった木簡の量は想像をこえる巨大なものだったのではないか。ベルグマン氏がムヅルベルジンで採集した約四〇〇〇〇點の木簡は始元六年から建武元年(B.C. 81—A.D. 25)の約百年餘にわたる紀年のあるものであったという。一年について四〇點に割りあてられる木簡が長い歴史の砂と土をくぐりぬけて今日までその命を保っていたのである。とすればその原初の量は……わたしは目がくらむような気がする。

しかし居延の木簡一萬點という數もわたしたちの感覺では多數なのだが、實際にそれを漢代の全木簡の中に投げいられてまぜあわせた時は全く見失われてしまう程度のものであるだろう。その見失われてしまう程度は、あの敦煌簡をまぜ合せてみた場合とどれだけの差が生れるものだろうか。居延簡は敦煌簡より一桁多いのである。一桁の數の増加がどれだけの意味をもつものだろうか。



たゞそれがわたしたちの感覚の中では異った意味にとられてきているのだ。一萬點の木簡はどんなフラグメントであろうとも、それは漢代の實物資料であり、ベルグマン氏が延長約二〇〇キロほどの地點で採集したものであるという點については全く等質なものなのだ。そうした意味はあの敦煌簡でも同じである。だから一萬點の木簡を操作して一つの假説を作つてゆくことは、いゝかえれば一萬の限定された單語をもつて、いろんな文を作るということに似通つてゐる。それゆゑ一千點の木簡を操作した場合よりも一萬點の操作の方が組合せははるかに多く、またはるかに複雑な意味を表現することができるのはいうまでもないことである。一千の單語しかもつていない人と一萬の單語をもつ人の作る文の差異はもちろんなわたしたちの世界では大きなものとして映るのである。だから一萬點の操作によつて得られた結果の方が一千點の場合よりも確かであろうとしかく素朴にわたしたちは考え易いのである。だが糸の細かな構造を知つていないで、原因の變化が直ちに結果の變化に對應するなどアプリオリにきめられるものではない。

しかし一方ではこれらの資料が全く等質であるとは―實

の處誰も考へてはいないのだ。それは資料内に紀年銘が含まれて現實に明確な時代差を知らせるものが相當に多いからである。しかし一萬の資料操作の作業はなんとなく魅力的なものがある。それは論理という魔物がいて、それにいついていけばどこか合理性に近ずいてゆけるように思われるからだ。そこで組合せに用ゐる資料に同時性という大きな假定を與えておくことになつてしまふ。そうして出た結果はしばしば第一近似であるというようにいわれる。

なるほどそれは一種の第一近似にちがいない。しかし歴史では時間の軸を中心とすることが基本的な考え方ではなくてはならない。同時性を與えるということは、この基本軸に大きな質的變化を與えてしまふことになつてしまふ。―時の流れに與える永遠の靜止―いゝかえればその時に資料は質的に大きな變貌をとげてしまつてゐるのだ。

資料というものは―特に同時資料というものは、それ自身は現在のわたしたちではうかゞい知ることのできない選擇則によつて殘存し見出されたものなのだ。だからわたしたちはそれを「偶然」という語によつていちおう成語化しておくことしかできない。居延簡一萬點の發見もベルグマ

ン氏の手からこぼれおちた一本のペンがいとぐちなのである。もちろんペンは落ちるべくして落ち、ペンの傍らにあった五銖錢がベルグマン氏の學殖を發火させたことはいうまでもなく、また發火すべき容量をもったベルグマン氏の學殖であつたこともごく必然であり、當然のことなのだろう。だがその一本のペンにまで至る事象の列を法則化してゆくことはほとんど不可能に近いことなのだ。しかしそれでも導き出された一萬點の簡が、それぞれの背後に独自の歴史的事實を負うた標本であることは動かないのである。その最初のボタンを偶然化してしまえば、これらの簡の残り發見された過程は全く無作為であるといわねばならなくなる。

だから居延簡の背後に存在したであろう巨大な量の簡は——統計學上で母集團としばしば呼ばれているものに相當するわけなのだ。一萬の簡の眞の意味はこゝにあるのだ。だからこれらの木簡が眞に居延を中心とする城塞をめぐる歴史的事實の標本としてどれだけの信頼度をもつものであるのかという疑問がしげんに生れてくるのだ。そうすると木簡の数が一桁多くなったからといってそのまゝわたしたち

は素朴に信頼度や確らしさが大きくなったと思ひこむわけにはいかななくなってくる。より複雑により詳細に組合せができるのは當然のことであり、問題はそうした組合せが歴史的にどれだけの價值をもちうるかということである。一桁ふえた出土木簡は代表性をどれだけ濃くすることができるのであろうか。それはボレル以來の問題である。

もうよく知られているように勞榦氏はこの全木簡を分類した。それは曾ての王國維氏が流沙墜簡によつて行つたものと全く同一の原理に立っている。即ち同時性の假定の上に立つて内容別に分類したのである。そこでは二〇〇キロに及んだと思われる出土地點の空間的な差違も前漢から後漢の初に至る一〇〇年以上の時間的な差も拾象されたものとなっている。いゝかえれば今日のわたしたちが手にする「居延漢簡考釋」はすでにひとつの變化を與えられたものであつて、最初の原初的なものではなかったのである。しかし現在ではわたしたちはこれを出土地點によつて分類し、並べ直された全木簡のカードをもつことができた。このカード化によつてはじめてわたしたちは全標本の初期狀態を知ることができたのである。しかし各出土地點の地理的な

位置はまだ不明なのである。この地理的位置が公表されていない今日では、カードもまだ相対的な意味合いしかもつことができないのである。

この初期状態に復原された大量のカード即ち全木簡のもつ歴史的な意味―代表性を調べてみるにはどうしたらいいかという課題がこゝに現れてくる。空間的な絶対位置が知られていない今では残る處は時間的な面においてその課題をといてみるこ

とがわたしたちでできる仕事ということになる。時間、即ち年代がそこで取りあげるべきこととなってきた。

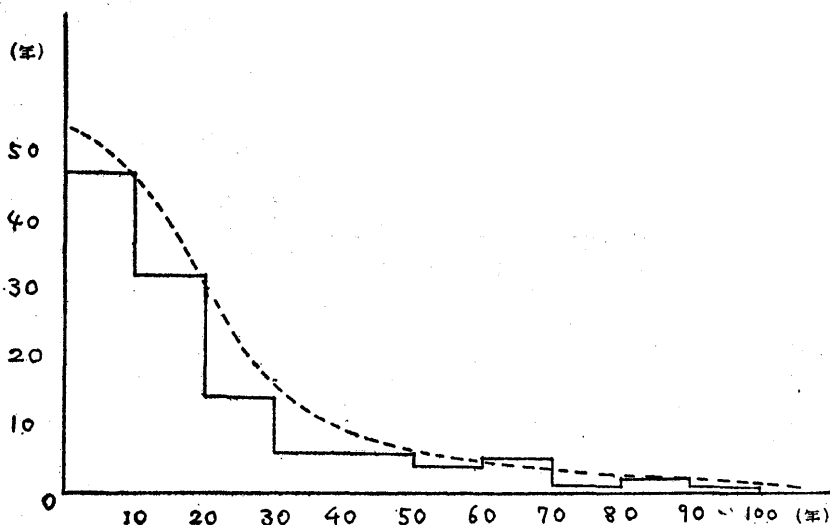
六〇〇に及ぶ木簡出土地點によって全木簡は約六〇〇の群に分けることができる。その各群のもつ歴史的な深度はいったいどれほどであるのか。時間にそつて―それは各木簡に記された年代の検出という作業によって知ることができる。年代の見出される簡を含む群は二六四群である。その二六四群の中からさらに年代幅をもつ群を抽出してみる。これは元號の異つた場合のみを拾つたのである。同一元號で二、三年の幅をもつた群もあるけれども、それはごく僅かであるし、また數字はしばしば誤讀され易いので除いて

みたのである。こうした手續の結果として一一八群が選出された。この一一八群の各郡内で、木簡に記された年代の上限と下限の差を求めると次表が得られたのであつた。さらにこれを圖上にとつてみると次頁の圖のような曲線になるのである。

0 ↓ 10	47
10 ↓ 20	32
20 ↓ 30	14
30 ↓ 40	6
40 ↓ 50	6
50 ↓ 60	4
60 ↓ 70	5
70 ↓ 80	1
80 ↓ 90	2
90 ↓ 100	1
上限 ↓ 下限	群個數

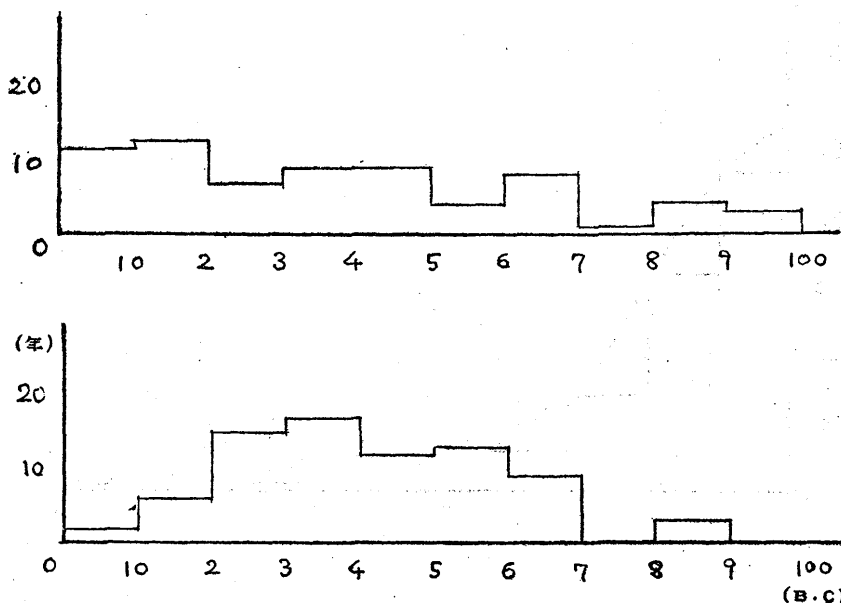
この曲線は誰でもすぐ氣づくように、ほとんど正規分布型の曲線となつてゐるのである。0 ↓ 20年の間ですでに全群箇數の六五%をこえている。だからほゞこのあたりが異つた元號の記載をもつ木簡群の主要群が集積する處となるのである。約六〇〇群から抽出した一一八群の示す主傾向はこの曲線の示すものであり、従つてこれから一般木簡群のもつ年代深度は平均二〇年程度ということになつたのである。この分布曲線のもつ偏差や信頼度の計算はこゝではいちいち示さないこととしよう。

次にこの一一八群について候及び隧の名稱を重ね合わせる作業を試みしてみる。これには米田賢次郎氏の努力によつて



木簡群年代深度分希

すでに各木簡群中に出現する候、際の名稱の對照表が未發表ではあるけれども作製されているので、これを利用させていたゞくこととする。一一八群中から候又は際名稱が含まれる木簡群を更に抽出してゆくと七一群が得られた。この各群のもつ年代深度をそれぞれの候、または際のもつ年代深度と置いてみると次圖(上)のときものとなる。即ち0↓20年、30↓50年、60↓70年の部分に著しい厚味がみられるのである。これは候または際の名稱をそれが存在していたということと同意義にとるならば候官または際について三種の存在のあり方が考えられるのである。即ち七〇年に及ぶ長期存続のものと五〇年ほどの中期間のもの、二〇年ほどの短期間ということになる。しかし統計で云えるのはこゝまでである。その事實の證明はもちろん別の方法によつてなされねばならない。またこれを實際の歴史的な年代の深さに置きかえて候、際の名稱を含む群の出現頻度を調べてみると次圖(下)のようになる。前二〇↓六〇年のあたりにその主要部分が集中する。いゝかえれば際、候の名稱の記載された簡はこの時代のものが最も多く出現しているのである。

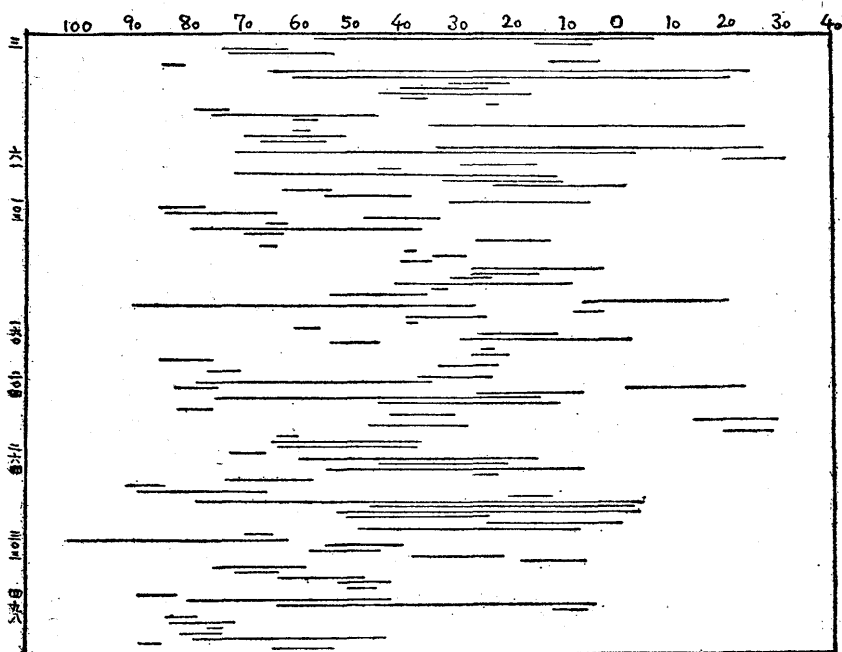


さて今までの作業は時間を單なる數量とみなして各群を取扱つてみたのである。しかしいまひとつの取扱ひ方、即ち歴史的な年代に従つて紀年號を含んでいる木簡群を整理する方法が残っている。ふつう編年と呼ばれている作業がそれである。そこでさきに抽出しておいた一一八群を編年として、各群のもつ歴史年代を圖示してみると次頁の圖が得られるのである。これは各群に含まれる異つた元號の年代の上限と下限の點を結んだことによつて一群の歴史年代の長さを與えていったものである。この編年分布圖にA.D十年を原點として十五年間隔で刻み目を入れてみると、各間隔に特徴のある群の出現度數がでてくる。即ち次表のように小數群と多數群が交替して現れてくるのである。これが何を意味するものであるか、それを解くにはふたゝび各群木簡の内容の検討に移らねばならぬであらう。

	群個數
A.D 10	9
B.C 5	18
20	34
35	50
50	36
65	45
80	34
95	16

これら一連の作業は、はじめに投げてみた居延簡のもつ

(出土地点号数)



木簡編年表

代表性の程度についてのひとつの解答である。出土地点という特性によって分類された数百の群は、その年代深度において一五—二〇年という値を主要値としてとるものであった。ということはこれらの木簡はこの程度の期間の事實を射影しているということである。そうした事實の中から偶然に抽出され來った標本——がこれら諸簡の負う意味となったのである。居延簡の背後にあったと思われる漢代文書的大量、その一部の遺存物は六〇〇餘群の標本群となった。標本群の示す事實はたしかに客觀的な事實である。しかしそれがそのまま母集團の大部分と對應するとはもちろんいゝきれない。だがわたしたちに必要なのは母集團についての結論であつて、木簡のみのものではない。しかし抽出された一一八群はその年代深度において正規分布の型の分散を示したのであった。これをもととして進めたいくつかの作業によってほど居延簡の漢代における歴史的な時間上の位置づけを試みてみたのである。それはごく粗い古典統計の利

用であるけれども、時間経過の視點からみた本簡の代表性の評價としていさゝかの意味をもつことができるものとおもわれる。

一般に歴史というものの記述は、必然的なものの發見と偶然的なものの分離がひとつの信條とされている。曾てフンボルトは歴史の物理學を考えた。それは力學的な平衡を基礎としてその上に因果律を求めようと試みたのであった。だがその場合にあっては彼は偶然という要素を必要としたのである。たしかの歴史の分野にあってはどことなく神秘的で氣まぐれないわゆる偶然によって支配される領域がすい分多いように思われる。だが日常的な偶然をも簡單な確率に置きかえることを追求したところに近代確率論の功績があった。それをおもう時、歴史の偶然をどのような法則に置きかえることができるか―がふたゝび反省されるのである。

## 京都大學大學院文學研究科

### (修士課程)東洋史關係講義題目

#### 東洋史學

##### 研究

蒙古民族史研究

田村教授

宋代專賣制度の研究

佐伯助教授

魏晉南北朝の社會と北方異民族

佐藤助教授

西アジア史の諸問題(學部共通)

羽田教授

##### 演習

雍正硃批諭旨の講讀と史料蒐集

宮崎教授

天下郡國利病書の講讀

田村教授

元史食貨志の研究

田村教授

中國中世思想史

塚本教授

元典章の講讀

安部教授

## Notes on the Etsin-gol MSS. (居延漢簡)

*M. Yoshida*

Several studies were done upon the calenders in the Etsin-gol MSS. (居延漢簡). So far the theory of Maspero has been predominant about the identification of the calender—4th year of Yung-shih (永始), and as for the date of the first year of Yung-hsing (永興), the theory of Chavannes has come to be very weak. (Herewith we should refer to ethnological sources as well.) Now Etsin-gol MSS., as many as ten thousand, have been classified into about six hundred groups by their pits. Examining the chronological width of each group together with some statistical method, I have concluded that their groups distributed the normal distribution on curve, and condensed 20 yeas width, and also tried to find a clue to the successive chronology among those groups.